
Town Revival

ノイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T o w n R e v i v a l

【Nコード】

N 2 8 3 1 B

【作者名】

ノイス

【あらすじ】

ただ普通に買い物しようとして夜中の3時に俺達のいつも見慣れた道、紅葉街道を雑談しながら、オタクと連呼しながら歩いていた。そんな時、俺達の前に黒い……。

パシリ

「今日も暇だなあ。なんかおもしろい事ないかなあ」

「まったく、お前は365日24時間同じことしか言えねえのかよ司」

少し低めのトーンで呆れた感じで俺の名前を呼ぶのは“水内俊介”。ちよつと長めの茶髪にボサボサ頭で伊達メガネを掛けていて、見た目は天才っぽいけど、実際はバカである。ただ・・・ある分野にのみズバ抜けている。学校ではちよつとした二つ名が付いているほど・・・。

で、ありきたりなセリフで話を持ちかけた俺は“宮内司”。ちよつと長めの黒髪を少し前髪だけ立てた感じで、黒眼、全身黒だらけのごくごく普通の高校生

「そんなこと、言ってもなあ・・・」

空気も冷え乾燥するこの時期。秋の色にすっかり染まった道、まるでトンボが舞い降りてきているかのように華麗に落ちてくる紅葉。俺達が歩いているここはちよつとした穴場の紅葉街道と言うところ。で、こういった両サイドに紅葉の木が見える景色が変わることなく永遠と3キロは続いていて、この時期はやたらと人が集まる観光名所みたいなおとこ

だが、今は周りに人の気配は全くない！ ま、当然だよなあ。

「はあ、寒いなあ。それにいくらなんでも人いなさすぎじゃねえか？」

「いや、今何時だと思ってるの？ 深夜の3時だよ！ 新聞配達にも夜勤にしても誰もいない。1日の中で一番人気の無い時間だと思うよ」

「そんなことないさ！ 僕はいつもこの時間は夜食買いに行ってる時間なんだからよ！」

夜食！！？ 深夜の3時に？ ありえない、ありえない

「お前そんな時間に何してんの？」

はあ、なんか意識したせいで余計に周りが静かに思えてきた。なんか虚しく俺達の声が響いてる気がする。

「ん、最近ちよつとアレの分野の勉強してんだ。それがなかなかおもしろくてよ。やめられないんだよ、コレがさ」

ニヤニヤと笑みを浮かべながらブツブツ呟く俊介

なんともまあ、嬉しそうに言うよなあ俊介。いいよなあ、夢中になれるもんがある奴はよ！ 俺なんかもうヒマすぎて毎日………

「なっ！ なにブツブツ言ってるんだよ！」

「うわあ！ なにするんだよ……あー、もう最悪だよ」

俊介が押したせいでいきおい余って俺の足は見事にピンポイントに集めてあつた落ち葉に足が埋もれた

中にはゴミも混ざっていたのかズボンの裾がかなり汚れていた

「あー、もうなんだってんだよ俊介！」

いきなりのハプニングに苛立ちを隠せない

「あちゃ、悪い悪い。まあ、いいじゃねえか。これで今日はいつもどおりの平凡な一日じゃなくてハプニングな日になったじゃねえかな」
「なにがハプニングな日だよ。それくらいなら楽しいこと起こらないかなあ」

「いやな司、あんなところに扉なんかあつたか？」

だが、俊介はいつものことと言わんばかりに軽く俺の言葉を流すと、不思議そうな顔で目を文字通り点にしてそれを見つめていた。

「扉？ なに言ってるのさ俊介。ここは俺達学生が毎日通る通学路紅葉街道だろ！ 扉なんかある、わけない、ハズ………なにあれ？」

黒い、穴？ そこを仕切りに後ろの景色がまったく見えない。

一度入ったら永久にさ迷うのではないかと言わんばかりの扉が、いかにも入ってください。っと言わんばかりのポジションに発生していた。

「まあ、とりあえず、行ってみるか」

軽いノリで俺達とはとりあえず足を止めずに落ち葉を撒き散らしながら歩いていった

「っと言うか、例の用事に行く道中だし嫌でも着いちゃうしね」

苦笑しつつ、俺は俊介に言った。その後、意外にも扉は遠かつたらしく10分くらいはまだかまだか、っとなんか2人はやや緊張状態で言葉の通わぬまま歩いていた

「ふう、やっと着いたな。で、どうするよコレ？ やっぱリシカトして通り過ぎるか？ 僕達は今から重大な用事もあることだし・・・」

「ん、いやいや何言ってるの？ 入るに決まってるよ！ 扉だよ！ 真っ暗だよ！ 意味不明物体だよ！ 扉だよ！ 入るしかないでしょ」

妙に、いや異常なほど興奮気味に俺は俊介に言い切った

「お前昔っからそうだよなあ。冒険とか大好きだったもん！ 興奮しすぎて2回も同じこと言うほどなもんなあ。この冒険病が・・・」

「確かに、確かに冒険は好きだけど・・・」

「だ・れ・が、冒険病だあ！！ そんなこと言い出したらお前は一種のオタクじゃないか！」

「オタク？」

どうだ。見事に言い返してやったぞ！

「そりゃ確かに僕はあの分野は自然の摂理に革命を・・・」
・・・しまった。

「さてと、じゃ、同時にジャンプして入るぞ」

ふー、こいつはあの分野になると話し長いからな。一度それで意味不明な単語を連呼しながら軽く半日は語りまくってたからな・・・

「なっ、おい！ まだ話が終ってな・・・」

つか、目の前に来るまで気づかなかったけど扉デカイなあ。軽く縦は3メートルはありそうだな。横も俺が両手を広げたくらい広いし。

なんとも威圧感のある扉だなあ。しかも、二つあるし。俊介の話を遮ることに夢中で（オイオイ）気づかなかった。

「さあ、いっくぞ！ レッツゴー！！」

「まったく、お前はいつもいきなり仕切り出すんだから・・・ったく」

文句を言いながらも俺たちは同時に扉の中に飛び込んだ。心を弾ませながら。この先のことを、何も知らないまま・・・

パシリ（後書き）

これからドンドン書いて行こうと思っています。初心者ですが最後まで読んでいただければ幸いです。感想等も心よりお待ちしております！ぜひ、この至らない作者にダメ出しをお願いします。

決闘！？

「……っであれ？ 何にも変わってないじゃん！ ここまだ紅葉街道だよな？ あれ？」

「よお司！ 久しぶり。なんか変わったか？」

「久しぶりってお前……。3秒前にいたじゃん。」

「ん、変化なし！ ただ通り抜けただけ」

「だよなあ。ま、いいか、さっさと用事すまして帰るか。じゃなきゃマジで俺達逝くよ？ まだこの若さで死にたくないだろ？」

などと俺が言ってる間に俊介はもう、扉のことなんて無視してそそくさとコンビ二に向かってまた歩き出した。まったく、昔からあいつは興味があること以外は無視だよなあ。それにしても、本当にアレなんだっただろ？

「って、おい。待てよ俊介！ お前、少しはアレのこと気にならないのかよ」

分かり切ってはいる事だが、走ってまで追いつくのが面倒だったので足止めがてら興味が無いのか聞いてみる

「なんだよ。アレ？ ああ、あの扉か。どうでもいいじゃねえか。何にも起こらなかったんだし無視無視！！」

ちよつと足を止め、俺の質問に答えた後またそそくさと足を前に進めた

まあ、確かに今はそれどころじゃないしな。下手すりゃ、本当に地獄を見かねないし……

「わかってるだろ。俺の姉貴の怖さが。司も身に染みてるはずだ」
俊介の姉貴。見た目は女優と言っても疑えないほどの美人。俺達よりも6つも上である。なのだが、美女と野獣ならぬ、美女の中に野獣！ 見た目に騙されると破産一直線クラスの腹黒女である

「そりゃそうだけども、これも全部お前が巻き込んだんだろ」
少し不満気に呟きながら俊介に追いつこうと歩く速度を上げた

「気にしたら負けさ！ さつさとおつまみ買って帰えろぜ」

全く、だから水内の家系は癖があるから大変なんだよなあ・・・

「あゝ、それにしても遠いよなあ！ こんなことをしてるくらいなら運動したい。そう思っわないか、相棒！！」

相棒・・・ねえ。

「塵ほどにも思わないな！ このオタク！！」

「オタクだあゝ。アレは社会貢献のためにだなあ、それをオタクとはなんだあ」

社会貢献って・・・。ただ興味本意に研究してるだけだろ・・・

「こりゃもう相棒解散だな」

はやっ、5秒前に組んでもう解散！！？ 意味わからなすぎだろっ！！

「しょうがない！ 決闘と行くか」

また唐突にこいつは。勝手に話を進めるんだから・・・

「ああ、ルールはいつもと同じな」

んゝ、まあ意味分らないことを言い出したのは今に始まったことじゃないしケンカとかしてるわりには付き合いが長いからか、お互いの考えがわかるんだけどね。・・・ケンカの意味あるのかな？

2人ともしやがみ、そして俺と俊介は同時に石を拾った

「分かつてると思うが、勝負は一度つきり、持ち球は一発つきり。いいよな？」

真剣みの混ざった俊介の声が紅葉街道に寂しく響く

「OK。行くぞ！！」

俊介に影響されてか俺も少し真剣に答えた

「おっしや。来い！！」

紅葉が風に乗る、紅葉街道を寂しく駆け抜ける。その瞬間！

俺たちは同時に走り出した！

お互いに距離をとりながら、石を当てようと睨み合う

「ほらほら、どうした？ 投げてこないのか？ このままじゃ決着つかないぞ？」

毎回、毎回同じセリフばかりいいよるからに！ このワンパターン野郎が

「ん〜？ そんなこと言って、今までに決着がついた事があったかよ！」

そう、俺たちは3日に一回はケンカするわりにはここ5年くらいずっと引き分けのままなのだ。戦績は610戦610引き分け。

「いい加減に白黒ハッキリさせようじゃないか！」

今度は俺からの挑発

「おう、ちよつと調子に乗りすぎじゃないか。まかせろ。今すぐ決着をつけてやるよ！」

むう、意外な迫力。いくらオタクとは言え、運動神経は俺以上に俊介の奴いいからなあ・・・

「ほう、やれるもんならやってみな」

お互いにジリジリと視線が火花のように弾く

俺は一步分左に跳んだ

何かが風を切り抜ける音。

俺が石を構え投げようとした瞬間・・・

「この5年間。俺が何も考えずにやってたなんて思うんじゃないぜ」
ニツコリと笑って言う俊介

「こ・これは!？」

俺は反射的につい前に出て俊介の投げたある物を落ちる前にキャッチした

「危ないなあ。歴史上最大の宝を粗末にするんじゃないよ！」

俺はむきになって前を向きなおし俊介に講義する・・・つとその瞬間！

「どうだ！ これが僕の考えた作戦“追いでよにゃんにゃんメロンパン作戦”だ

ハハッ、これで俺の勝ちだア〜」

高々と笑いながら石の狙いを俺に合わせようとする俊介

「なにイ!？ 卑怯だぞ。つか、そんな変な名前の作戦なんかを負

けてたまるか」

必死に、ある物・・・メロンパンを食べながら良い方法が無いかと考える

「俊介の石が投げ出された！・・・あれ？」

つと決闘の最中、いきなり進行方向に現れ俊介と俺の間に割り込むようにして現れた黒い・・・影。あれ？こんなところに人なんかいたっけ？

「え！？メロンパンが飛んでそれを拾ったら負けるの？・・・謎な世界なんだねえ」

・・・・・・

「さて、調査もできたし帰ろつと」

・・・・・・！！？

「いやいや、そこは待とうぜ！つか、ツッコもうよ」

必死に俊介は慌ててそいつを引き止めた

不思議な双子

「なにいゝ？ なにか用でもあるの？ それにしても、あなた達こんなところでなにやってるの？」

「いやいや、それはこっちのセリフ！ いきなり決闘の最中に目の前に現れといてそのセリフはないよ・・・」

「あなたは何者ですか？」

俺は結構丁寧に聞いてみた。・・・？ 何者って結構失礼かな？

「おいおい！ いくら怪しいからってそれは失礼だろ！」

俊介も気づいたらしく耳打ちしてきた。・・・って怪しいってのもどうかと思うけどなあ

「私はツリって言います。で、あなた達こそ何者なの？ もしかしてウェーリーの人？」

髪型は少しウェーブをかけた感じで淡いピンク色。髪の長さは肩辺りまで。服装は特に目立った飾りも無い布製らしき服を全身にコートみたいに着ている。どちらかと言えば庶民みたいな格好をした女の子の名前は“ツリ”と言っらしい。ちよつとここらではあんまり見ない服装だけど・・・

「ウェーリー？」

また分けの分からの事を・・・。っと思いながら俺と俊介は声を合わせて聞いた

「え？ 知らないんですか？ そつか、みんな接触した人は記憶を消してるんだったっけ？ じゃ、私もコレで・・・と準備OK」

え？ なんか独り言でとんでもない事いつてる気がするんだけど・・・

「なあ俊介。あいつ、もしかして？」

「たぶんな。よし！ 1・2・3で行くぞ。いいな？」

よし、密談完了！ ミッションスタートだな

「さあ、あなた達これ食べて」

2

「いい？　じゃ、絶対に吐かないでね」

3

俺達は渡されたカプセルを持ったまま、無我夢中になってコンビニとは逆方向に走り出した

「ああ、ねえ、ちよつ、待ってよ……ねえ」

「ハハツ、待てないって！　記憶を消されるって分かってるのに逃げない奴がどこにいるってんだよ！」

まったくの同意見だな。もつと言ってやれやれ俊介！……はあ、俺って情けないなあ」

にしても、俊介の奴テンション上がりまくりだなあ。やっぱり俊介も姉貴でのストレスが溜まってるのかな？

「えっ？　なんで記憶消すって知ってるの？　ねえ、待ってよ」

いやいや君、おもしろい声に出たから……

「じゃ、また今度ねえ。バイバイ」

ま、もう会うことはないと思うけどな。

……え？　もしかして、また？

「まったく、逃がさないわよ」

またも前に立ちはだかる女の子

「わかったよ。じゃ、早くしてよ！　急いでるんだから」

え？　俊介の奴なに言ってるの？　つうか、逆ギレ？

「よしし司。作戦Bで行くぞ！」

何が分かったんだか……。そうか、あの伝説の作戦か！　でも、

アレはそんなに多様していい物なのか？

「じゃ、いいですか？　まず状況の説明を……」

彼女が俺達に何かを伝えようとした瞬間、俊介は言葉を遮った

「あつ！　モンスターだ！」

俊介が不意にとんでもないことを言う

「えっ！！？　まさかついて来れるわけ……」

つて、ええ!!?　なんかあの人リアルに信じちゃってるし。

やばい、初めて成功した。ああ、27回連続失敗伝説が……。

「よし!　今だ逃げるぞ司」

俺と俊介は同時に、今度はコンビニ方面に向かって走り出したそう、作戦Bとは俊介が敵の注意を引いているうちに逃走するという。なんとも子供染みた作戦なのである。

はあ、なんでこいつは……。相棒の俺でも未だに分からないことだらけだよ

「ところでさ、なんで俺たち逃げてるんだっけ？」

さつきから不思議にだったので“ゼーハーゼーハー”と逃走しているため息を切らしながら俊介に聞く

「は?　お前なに言ってるの?　記憶消されるんだぞ!」

その質問に対してまったくの疲れも見せず“ケロツ”とした顔で俊介は言う

「え……。いや、だってさ。ノリで逃げちゃったけどさ、俊介信じてるの?」

えっ?　っと驚いた感じで俊介の走るスピードが徐々に落ちて行く

「でも、あいつワープみたいなのしたじゃん」

「今は深夜だから見えにくかっただけだろ。しかも、俺らは決闘に集中してたんだから気づきにくかったも仕方なかったし……」

「でも、ほら。一瞬で俺らの前に移動したじゃん」

俊介の言い訳はまだ続く……。かな?

「え?　もしかして俊介気づいてなかったの!??」

マジで!??　っと俺は信じられないような声で聞く

「へ?　なにが?」

キョトンとした感じで俊介は俺を見ている

「だって、違ったでしょ」

俺は後ろから走ってくる謎の女の子を見ながら納得させるように俺は俊介に言った

「だ・か・ら、なにが!!」

もお、怒鳴るなよ

「だから、“眼”が全然違ったでしょ」

「眼？　じゃあ、もしかして彼女って2人いたの？」

俊介の奴、本当に気づいてなかったんだ。やっぱり、オタクで決定だな。だって、人を見る目×、作戦案×、例の分野。あきらかにオタク一筋16年って感じだな

「はあ、やっと追いついたわ。ちよつと待ってよ2人とも！　話を聞いてよ」

「はあはあ、待ってよおねえちゃん」

んー？　今度は2人揃って登場か。必死に息を切らしながら舞い落ちた落ち葉を掻き立てながら紅葉街道を後ろから走って追いかけて来ていた。

てか、対場逆でしょ。普通、俺たちが怪しいと思って追い駆けるもんじゃないの？

「えつと、まず何から話せばいいのかな。とりあえず誤解を解かなきゃね。私の名前は“ミナ”。私の妹が変なこと先走っちゃったみたいでごめんなさい。

記憶を消すってのは正直な話ウソです。まあ、通常は消すみたいなんですけど、今回は特例だから」

こちらの有無を聞かずに話をどんどん進めるミナ。っていうか、初対面でいきなりタメ口・・・

「それで、私たち姉妹が“ドルフィン”来た用件は・・・・・・・・」

「ちよ、ちよつと待って！　“ドルフィン”ってなに？」

おお！　すかさず質問する俊介。珍しいこともあるもんだなあ・・・

「ああ、そっか知らないんですね。“ドルフィン”って言うのは私たちの世界の名前です。ちなみにこの世界は“ウェーリー”って言うんですよ」

「ああ、ツリが言ってた“ウェーリー”ってそういう意味だったんだ」

ちよつと話を割り込むように俺は言ってみた

「ふーん」

俺に話を割り込まれたからかいかにも不満そうな顔で俊介が睨んできた

なんだよ……。俺なにか悪いことしたか？

「えっ？ ツリがですか？ 本当なのツリ？」

えっ……。その反応はなに？

「うん、だってこの人たちなら大丈夫そうだったんだもん」

んー、どういう意味だろう。なんか、バカにされてる気がするんだけど

「いや、そういう意味じゃないんですよ。ただ、ツリはあんまり知らない人と話をしないから。めずらしいなあ、と思って……。」

なんだ、それなら良かった。って今、俺しゃべったっけ？

「ま、大体わかってもらえましたか？ じゃ、さっそくコレを持ってください」

……。女の子に一方的に話を進められる俺たちの立場って一体

「あの、その前に3つくらい質問いいですか？」

「はい。まだなんか私、そんなに言い忘れてましたか？」

ええ？ あれで本当に会話終わらす気だったの！！？ まだ誤解を解いただけな気がするんだけど……。――

「じゃあ、まず、あなた達は何の調査に来たの？」

まあ、俺たちが一番知りたかったとこだな

「えっと、なんのことですか？」

「え？ だって、初めにツリが現れた時、調査完了って言ってましたよ」

すぐさま俺が聞き返した

「えっと、ごめんなさい。アレは、こっちの人たちに私たちの正体をバレないようにするために言わなくちゃならないことなんです」。

実際ここに来た理由は……。あっ――！

突然なにか思い出したかのように声を上げるツリ

バレないように。って逆効果じゃない？ 完全に自分たちからバラ

してるよね

「えっ？ ツリさんどうしたんですか？」

おどおどしながらミナと目を見合わせる二人。

それにしても似てるよなあ。違いといえば・・・眼とよく見れば髪もか。ツリは優しそうなゆとりとした眼、ミナは自信に満ちた強い眼。つてとこかな（適当）髪の違いと言ってもストレートかウェーブがかかっているかの違いで、実際近くで見ないと分からないほど背丈に形、服装まで他はそっくり鏡にもう1人いるみたいである・

「おねえちゃん。ちよつと残り時間が・・・」
残り時間？

「あつ！ そうだったわね。確か私たちがいられる時間は30分だけ、それまでに呼ばなくてはいけないんだったわ」

「いられる時間？ 呼ぶ？ ああ、またわけが分からなくなってきた

「ああー！！ おねえちゃん、あと5分しかないよ」

さらに事態は悪化したらしいが、俺と俊介はまったく話しに入れず呆然と話を聞いていた

「ええ！！？ いつの間にそんなに時間が。そつか、この2人を追いかけてたから。じゃ、この2人でいいかしら？ 結構信用できそうだし。責任もとって貰わなくちゃいけないしね」

この2人？ 信用？ 責任？ 気のせいかな。すごい流れがあつちに行けてきな雰囲気になってる気がするんだけど。

「んー、そうね。いいかな。頼りがいはないけど悪知恵はあるしね」

「・・・これは褒められてるのだろうか。やっぱ、貶されてるのかな？ 俊介の顔もなんか引きつってきてるし

「じゃ、いきなりで悪いんだけど2人をお願いがあるの」

部外者

「いいよ！　なんか楽しそうだし、準備もないから今すぐ行こ」

もの凄く心を弾ませながら、俺はミナに言った

「えっ！！？」

ミナとツリは同時に間の抜けたような声を上げる

あれ？　なんか俺以外みんな凄く驚いてる？

「え？　行く。って私しゃべったかしら？　あなた達2人に来てほしい。って」

「んー、まあそれくらい俺にでもわかったけどさ、俺が驚いたのは司が行く。ってなんの躊躇もなく言った事だな。で、本気かよ司！

家族とか学校とかはどうするのさ？」

んー、俊介って現実的だなあ。あれだけメチャクチャしてるのに、いざって時は役に立ちそうだな

「まあ、まず学校はいいとして、家族は大丈夫だろ。“俊介といっしょに世界一周旅行にでも行って来るわ”って置手紙でも置いてけばいいんじゃないか？」

自信満々に言う俺。うん、我ながら最高の案

「えっ！　まあ、家族はどうでもいいけど問題は学校だな。もう俺らは高校2年、そろそろバスケの全国大会近いんだぜ」

うわあ、来たよ。まあ、確かに俊介の家族は姉がいるけど・・・アレだもんなあ

で、その後母親が他界。今はかろうじて元父親から送られてくる最低限の生活費で暮らしてるらしいけど……。聞くに聞けない話題だから正確なことは俺も知らない

「じゃあ、次の質問。君たちが今来みたいに行きができるなら、帰りもいつでも帰れるってことなの？」

ああ、なるほど。自由なら時間なんてあんまり関係ないな。でも、それだったら……。なあ。

「ああ、それは無理かな。私たちもやっとで来れたんだ。実は、今あつちの状況もあんまり良くないの。だから、昔とは違ってここ100年以上は誰もこつちに来てないはずだよ。」

「ん、そうか。じゃ、やっぱり学校は諦めるしかないか。な、司」
「そつか、よかつたよかつた。」

「おい、なに嬉しそうな顔してブツブツ言ってるんだよ？」
鋭い視線を送ってくる俊介。だって・・・

「そりやお前。帰れたらおもしろくないじゃん！ 冒険になら無いでしょ。だから良かったなあ。っと思っただけさ」
「ま、内心部活もサボれて一石二鳥だけど。」

・・・・・・！！？

「イタツ。なんで叩くんだよ俊介」

「司。お前、今部活サボれてラッキー！ って思ってただろ」

「うっ、またも心を打ち抜くような鋭い視線。見事に胸のうちを読まれている。」

「そ、そんなことよりも、ミナ！ どうやってあつちに行くんですか？」

「えっと、扉を通して向こうに行けます。現に私たちもそうやってこつちに来たわけだし」

「ん？ でもミナさん達の世代で初めてだよな？」

「えっと、どうやったの？ ミナさん達の世代で初めてってことはそんなに簡単に帰れないような・・・大丈夫なの？」

「俺が質問を終えた後、俊介が驚いた感じの目でこつちを見ていた。」

「おお、もしかして結構いい質問したかも。」

「なに言ってるんだ司。さっきから話し聞いてなかったのか？」

「そりや学校行かなくていいし、冒険も出来るって事で浮かれてたことは否定しないけどさ。」

「でも、なんかそれに関すること話してたっけ？」

「いくら初めてだからって一度来れたってことは、それなりに準備が揃ったって事だろ。だから、すぐには帰れないけど、用件をはた

すころには……って。あれ？」

「ん？ どうしたんだ俊介？」

まだなんか聞いてなかったっけ？

「ねえ、つりりんとみななん。俺達って何のためにそっちに行くの？」

えっ！ ああ。一番肝心なのはそこか……。いや、ハラハラの世界冒険ファンタジー……。

「冒険病……。まさに、旅をせずにはいられない放浪者。司にぴったりだな」

「で、実のところどうなんですか？」

俺は俊介の言ったことをサラッと無視して2人に聞いた

「えつとお……」

同時に口を濁らす2人……

「ん？ どうしたの2人とも？」

俺なんか悪いことでも言ったかな？

「ごめん。実は他の世界ではこちらの情報をもらしちゃダメなの。

それに、今からの話は完全にこちらの世界の状況を説明することになるから。きちんと“ドルフィン”に行ったらゆっくりと話すからその時まで黙って付いて来てほしいの」

その瞬間、紅葉街道を冷たい風が通ったことに、いや俊介がまるで起こしたようにさえ感じた。

「早くコンビニに行くぞ司。俺はまだ寝たいんだから早いとこ終わらせて2度寝しようぜ」

えっ！？ こいつ何を言ってる……

「お、おい俊介。なに言ってるんだよ。あっちの世界に行くんじゃないのかよ。さっきまでお前もノリ気だったじゃないか！ いきなりどうしたんだよ」

いきなりの俊介の変貌ぶりに俺は早口で、呶鳴るように言った
「……………」

誰も答えてくれないまま、俺の言葉は夜の紅葉街道の闇へと消えて

いった

「やっぱり、私達ではダメだったのね。せつかくお父さんが見つけて来てくれたのに。やっと、やっと来れるようになったのに。私が頼りないから」

震えた声でそう言うミナは顔を伏せてしまった。・・・泣いてるそう思うと俺は胸の辺りが空っぽになった気がした

「そんなことないよお姉ちゃん！ お姉ちゃんは話するのが苦手な私の弁解してくれたり、今だって状況説明をしてくれてるでしょ」。私なんかなんにもしていいし。人に見つかるし。足手まといなツリのせいだよ」

ああ、ツリまで顔伏せちゃったし。俺達・・・なにやってるんだよ！

「おい！ 俊介。本当にこれでいいのかよ！ 冒険のチャンス逃して、女の子泣かして、あっちの世界の人たちも困らせて、お前は本当にそれでいいのかよ！ それに、それにお前・・・！！」

思わず・・・心に現れたもやもやを言葉にならないような言葉で俊介にぶつけてしまう

「・・・・・・・・・・」

「もういいの、つかさ。私が頼りないから信用ないから、しゅんすけは怒ったと思うの。もう私達時間だから行くわね」

え、そんな急になにを・・・

「どういうこと？ そういえばさっきも時間がどうとか言ってたけど」

「実は私達は特殊な能力を使って、空間を歪めて、その歪んでいるうちに珠を使って来たんです」。

で、その歪んでいる時間が30分しかないんですよ」

ああ、なるほど。だから唯一こっちの世界で説明をした俺達に決めるしかなかったってわけか。なんかちよつと複雑・・・

「つと言ふことは、時間がオーバーすると帰れなくなるのか」

「そういうことです。それと、通るためには“珠”がないと通れませんけど。あなたも分かりましたか？・・・部外者さん？」

ああ、だから俺達は“あの扉”を見ることは出来ても入れなかった
ってわけか。・・・部外者？

「ええ、わかったわよ・・・フッフ、楽しそうねえ」

ゾクツと背筋が凍るような甲高い声。まさか・・・

旅の始まり

「アタシ遥華って言うの、宜しくね。そっくりなお二人さん」

なんでこんな所に、遥姉が！？ さっきまで飲んでたハズなのに・・。

ああー、もう気分最悪！ せっかく学校もなくて遥姉の支配からも逃れられる夢のような世界に大冒険に行けると思ったのに・・。

これじゃあ、計画が台無しになりかねないな

「あの一、遥姉。俺達すぐに戻るから待っていてくれよ」

必死に家に追い返そうと作り笑顔でがんばる

「そうだよ。姉貴！ 姉貴は家で飲みまくっててくれよ。今日は第24回目の失恋記念日だからさ。俺達が働くって」

俊介も俺に続く。つーか、今日荒れてたのはそのせいか・・。

「それにしても遥姉が失恋って似合わないよなあ」

あらためて遥姉を見直しながら俺は呟いた

「ちよつと俊介！ 紛らわしい言い方するから勘違いされちゃったじゃないの。違うのよ司ちゃん。失恋って言つよりも正確にはアタシが大学に入学してから告白されてふった回数が24回目なの。中高の黄金時代を入れればもうケタ違いに多いんだから」

男をふるのに黄金時代なんて作るなよ・・。まあ、それなら確かに納得だけどさ。

「その男の人危ねえな。禁断の領域に危うく入るとこだったじゃん」

俺も俊介に同意だな。だってもし付き合えてたら骨までしぼりとられて捨てられそうだもんな

「ん？ 俊介なにか言った？」

「な、なんにも言つてねえよ。空耳でしょ？」

いくらなんでも動揺しすぎ・・。

「・・・・・」

ひと時の間。まったく、この時間がないのに！ などと思いつつ、

ミナが答えるまでに30秒経っただろうか。

「ま、実際だれでもいいんですけど、なんでこんな所にいるんですか？」

後ろを向きながら、あきらかに不審者扱いする口調で話すミナ。まあ、時間もないし、仕方ないけどな。

「いやーなんかおもしろいことが起こりそうな気がしたから、俊介たちつけてきちゃった」

俺達の必死の議論は無視ですかぁ！？ やばい、このままじゃ非常にやばい。俺達のパラダイスの切符が今まさに侵されようとしている

「ミナ、大丈夫なの？ 他の人に聞かれてるけど・・・」

俺は遥姉に聞こえないように声を潜めてミナさんに言った

「んー、そうねえ。大丈夫だと思うよ、どうせ私達以外、世界に来る方法なんて知ってるわけもないしね」

まあ、確かにね。実際、俺達も付いて行くだけだしね

「じゃあ、俺達も“珠”ってやつがないと行けないんですね？」

「はい。そうです。はいコレがあなた達の分ですよ」

ちっちゃくて真ん丸いくて光を通すこれは・・・。ビー玉？

「コレが・・・“珠”？」

「そうですよ」。私のお父さんががんばっ・・・」

慌ててツリの口を押さえるミナ。

どうしたんだ？

「それは言っちゃいけない約束でしょ？」

ツリの耳元でボソッと注意するミナ。そこまでして何で隠す必要があるんだろ

「あつー！ そうだったね。ついつい言いそうだったよ。ごめんね。お姉ちゃん。じゃあ、とりあえずこの珠を持ってください」

二人揃って話しているとまるで、1人の女の子が鏡と話してるように見えてなんか複雑。本人達はどうも思わないのかな・・・

「アタシも1つ貰うわよ。もちろん、いいわよね？」

話を割り込ませてくる遥姉

「うああ……。眩しい笑顔。アレで性格がまともだと最高なんだろうけどなあ。どんよりとため息を混ぜながら俺は遥姉の顔を見上げた「ん？ どうしたの司ちゃん。もしかしてあまりに美しいアタシに惚れちゃったのかな？」

アハハ、と無邪気に笑ってみせてきた

「遥姉。どこで道間違えたんだ？」

いや、冗談抜きでマジで……。

「うつさい！」

いきなり顔を鬼にさせ俺の頭に痛烈のゲンコツが飛来してくる

「ああー、イッテエ！ なにも殴らなくてもいいだろお」

俺は眼に涙を浮かべながら頭をスリスリと撫でた

「司ちゃんが悪口言うからでしょ。まったく。で、ツリちゃん、アタシももらってもいいわよね？」

もはや半分脅してやるだろ……。それ。

「んー、いいですけど、命の保障はできませんよ？」

命の保障！？ 分相応ってやつか。それなりの楽しみにはリスクも伴うってか

「いいのいいの、当然のリスクよ！ それに、司ちゃんと俊介をからかえなくなるよりは百倍マシなんだから」

そんなア……。俺達はあるたのストレス発散機じゃないってのに……

隣にいる俊介も……。あれ？ って、ええ！？ 俊介！？

「アハハ……。俊介、そんなに慌ててどこに行こうとしたのかな」

ああ、俊介の奴捕まってるし……。まったくさつきから喋らないと思っただら頭悪いんだから。逃げてても意味ないっての。それくらいなら遥姉をこの場から立ち去らせないと（オイオイ）

「うああ……。やめろよ姉貴。弟を何だと思ってるんだよ！」
ジタバタと必死にもがく俊介

「なに言ってるのよ。あなたは大切なアタシの唯一の肉親だし、も

ちろん司ちゃんもアタシの大事な友達よ」

俺は友達になつた覚えはない！

「嘘つくんじゃねえよ……腹黒女が」

……俊介の口からとんでもない言葉が！

「あら、そんなこと言うのね。いいのよ、あのこと司たちに言つちやうから」

あのこと？

「なんのことだ。腹黒姉貴」

懲りないなあ。俊介も。

「白を切るのね。ほら、ユキちゃんがあんたの……」
ほう、それは初耳だな

「ああー、ダメだア……。それだけはダメえ……。頼むからよ、姉貴！」

「遥姉！ 是非もつと詳しく！！」

俺は俊介の両足を掴み暴れさせないようにする

「あら、そんなに聞きたい？ ウフフ、でも残念。俊介が降参したみたいだから今回は止めとくわ。弱みはもっていて損はないからね」
不敵な笑みを浮かべながらパツ、つと俊介の首から手を離す遥華さん。

さすがの腹黒つぶりだな

「なあ、俊介。ユキちゃんとなんかあつたのか？」
さつそく俊介に聞いた

「うるさい！ 裏切り者に教えることはねえよ」

ブン、つと顔を逸らしてしまった。

しまった。ちよつとからかい過ぎたかな……

「ところで……」

ちよつと話に入りずらそうに会話に割り込むミナ

「ん？ なあに？」

それに、俺達とは打って変わって超美人優等生てきな表情で聞き返す遥姉。まさに、天使と悪魔の二つの顔持つ女……遥姉

「俊介さんと遥華さんは姉弟なんですか？」

今頃！？

「ええ、そうよ、俊介はアタシのかわいいおもちゃなの。もちろん
司もね！！」

えー！？ ちょっと待てえー

「さつきと言ってる事違うだろー。それに俺はおもちゃじゃねえー
」

「僕もだア~~~~」

たまらず遥姉を責めるように叫びまくる俺達。だって・・・そりや
ないでしょ

「おもちゃですか！？ 司さんも！？ ……頑張つて下さい、お
2人とも」

ええ、ミナにまで見捨てられた！？ この会話で遥姉の本性を見抜
いたか。それにしても遥姉、俺達何かしましたか・・・

「・・・じゃ、そろそろ行きますかあ」

ちよつとミナの背に隠れるようにしてツリが本題に戻す。

やっぱり怖かったんだ……。うん仕方ない。これが自然の摂理だ
もんね

「行こう、行きましょう。今すぐ！ とにかく、この場から離れま
しょう！！」

逃げる！ 逃走！ 脱出！ それ以外に俺に選択肢はない！！

「そうね、時間も無いんでしょ」

意外とあっさり答えた遥姉

「それもそうですね。じゃあ、先に言っておきますけど、遥華さん
は無事に辿り着けるかわかりませんよ」

むしろそのほうが助かる。いや、そうなつてくれないと困る。

「フフフ・・・アタシに不可能はないのよ」

分けがわからない・・・けど、どんなことがあつても無理矢理どう
にかさせそうだからこの人は怖いよなあ

「まあ、多いに越したことはないですけど、確かこの扉は定員が2

人なんですよねえ。それに、もし入れても同じ場所に飛ぶかわからないよお」

「え？　じゃあみんなバラバラになるてことですか？」

すかさず、俊介が尋ねた。

「いや、そこは大丈夫ですよ。私とお姉ちゃんはその事を考えて、ちゃんと地図を頭に入れてきましたから迷うことはないですよ。・たぶん」

なに・・・その最後のたぶんって・・・

「でも、それで街へ帰るほうの問題は解決しましたが、姉貴はどうするの？　定員2名なんだよね？」

「きつと大丈夫よ。それに2人ともいなくなったらアタシが寂しいじゃない」

うわあ、柄にもないこと言ってるし・・・

「えつと、心配はないですよ。つとまでは言い切れません！　ただ、方法がありますよ。ね、ツリ」

ミナもこの話題になってからツリに頼りっぱなしだなあ。その頼られてるツリもたぶんとか危なっかしいこと言うし・・・この双子、信じてもいいのか心配になってきたなあ

「うん。あの扉は2人入ると消えてしまいうんですけど、この珠さえ持っていれば“たぶん”時間になれば強制ワープでいけると思いますがよ」

なんでツリはこんなに“たぶん”を強調するんだろ……。もしかして、実験台！？

「ん、まあ、時間ないんで行きますよ。組はこのままでいいですよお」

このままって言うと、俺とミナ、俊介とツリ、腹黒おん・・・遥姉だけ1人か。まあ、妥当かな

「じゃ、あらためてみなさん。“珠”は持ってますね。親との連絡も変な物でしたかね？　では、忘れ物があっても下手に行けば2度と帰って来られないんで知りませんよ。まあ、今更もう遅いけど

ね」

やっと夢のような世界に出発だつてのに、怖いこと言つたよな、ミナ
「じゃ、みなさん。私たちの街“フレッティ”で無事会いましょう
ね。では、出発で〜〜す」

幽魔

あれ？ 頭がグラグラするなあ。なんか変なものでも食べたかなあ。
・・・

「起きてよ、ねえ司！」

んー、うるさいなあ。せつかく人が気持ちよく寝てるのにいー

「ねえ、つてば。もうこうなったら・・・」

あれ？ 急に静かになったなあ。諦めたのかな？ つて、んー。なんで俺は寝てるんだっけ？

「えーい！ 起きてえー。司！」

「イタツ、イタタタタ。なにになにつ！？ 一体何が起こったの？」
突然の出来事に俺は跳ね起きた

「ふう、やつと起きたわね。いくら時間差が大きいからつていきなり寝ないでよね。これからが大変なんだからね」

えっ？ ああ、そうだった。俺達は扉に入って、そのまま変な空間に飛ばされて、そしたら、急に睡魔が・・・。あら、すっかりいつもみたいに学校で寝てると思ってた。

「ふあーあ、ごめんごめん。つい寝ちゃって」

でも、だからって、普通みみ引っぱるもんかなあ。

「まあ、確かに初めは慣れてないからしょうがないわね」

んー、なんかいきなり明るくなったなあ、ミナ。しかも、

「まあとりあえず、ここどこ？」

まあ、当然の質問だよな？

「ああ、ちよつと待つてね」

つと言うと、ミナはカバンの中から地図らしき物を取り出し、周りをグルグルと見渡しながら歩き出した

んー、それにしても、殺風景だなあ。これじゃ異世界って実感無いなあ。なんたつて、俺達の視野に入る物と言えは“岩”、“枯れ草”、“砂”。それに、太惑星が５つくらいあるけど、気温とか重力

はさほど変わらないみたいだな

まったく、これじゃあ現実世界の砂漠と変わらないじゃないか・・・

「ああー、これじゃ何のために来たのかわかんねえよぉー」

本当に期待ハズレ・・・。なんかこう、もつといきなりモンスターだ。隕石だ。阻止しないと世界の滅亡だ。って感じのが無いのかなあ

「はいはい、自分の世界に入るのは勝手だけど声ださないで。今ここがどこか探してるから。あと、あんまり動き回らないでね。大変なめに会うことになるかもしれないからね」

うう、自分の世界って・・・。ちよつと酷くない？

「大変？」

とりあえず気を持ち直して俺も周りを見渡しながら聞いてみた

「まあ、嫌でもこれから分かるわよ。こつちの世界にいればね」

んー、よくわかんないけど別に今は関係ないならいいや

「あつ！・・・。はあ、よりによってここに出ちゃったか。んー、どうしよっかなあ」

思いつきり暗い雰囲気をかもし出しながらため息をするミナ

「どうしたの？　もしかして、かなり遠かったりするの？」

少し冒険の期待をしながら俺はミナに聞いてみた

「いや、近いんだけど・・・。遠いかな」

近いけど遠い？　意味がわかんない

「どういうこと？」

ちよつと真剣な空気

「えつとね、道のりは短い。でも、街までの道のりの途中に“ザーバ平原”を通らなくちゃ行けないのが問題なのよね」

「“ザーバ平原”？　なんか凄いものでもあるの？」

ちよつと、心配と期待を交えた声で俺は聞いた

「んー、“F級幽魔”が出るの。しかも今年はなぜか異常発生してるから、かなり大変なめに会うかも知れないわね」

“幽魔”？

「ねえねえ、“幽魔”ってなに？ “ドルフィン”で言うモンスター
ーみたいな感じの奴？」

とりあえず、今までの知識を絞り出す。まあ、これでも結構冒険関係は勉強してるつもりだしね。いわゆるサバイバーって奴かな

「そうそう、あなたが私を騙したのに使ったあの言葉よ。まったく、あの時は本当に驚いたんだからね」

あら・・・しまった。まだ根に持ってたか。これからは禁句ワードになりそうだな。

「で、その“幽魔”って言うのは強いんですか？」

とりあえず、今は“幽魔”！ もう聞いたことの無い単語にわくわくを隠しきれずおもいつきり声のトーンを上げた

「まあ、“幽魔”にも階級があるの。今回、“ザーバ平原”で出る“幽魔”の階級はさつきも言ったように“F級”。

まあ、“幽魔”の中では最弱級ね。まあ、一体ならだけど・・・。集団となる結構きついから、気をつけるに越したことわないわね」

“F級幽魔”かあ。やばい、命がけなのに心臓がバクンバクンして今にも襲われるのは勘弁だけど会って見たいな

「もしかして、それが有名な“冒険病”ってやつなの？」

・・・・・・！！？

「なっ！ だ・れ・が冒険病だあゝ。いくらミナだからって、それだけは言うのは禁止！ 禁句の中の超禁句だよ。わかったな？」

「そ・・・そうだったの。ごめんね」

かなり焦りながら謝るミナ

しまった。つい大声を出しちゃった。そうだな、よく考えたらミナは知らなかったんだもんね。そうさ、元凶は全部俊介だ。よし、あとで覚えとけよ。

——この場にはいないけど

「な・・・なあ、じゃあさ、こっちの世界の“幽魔”ってのはどうやって階級分けしてるの？」

「ちょ、まあいいわ。えつとね、階級が上位になってくると、しゃべる奴や、変身する奴、特殊な能力を持つ奴なんかもいるわね」

おお。カツコイイ!!

「じゃあさ、じゃあさ、上の階級の奴は最強ってことだよな。ああ、楽しみだなあ。早く会えないかなあ」

「今会ってもやられるだけだよ。本当に司は好きなんだね。冒険とか探検とかがさ」

「そりやそうだよ。なんたってこれは……」

つとこれ以上は禁止されてるんだつた

「えっ? “これは……” なんなの?」

「まあ、気にしないで。これは親父に止められてるからさ」

苦笑いしながら俺は、ミナに答えた。

「そうなの? なんか気になるけど、まあいいわ」

ふう、危なかった。もし言ったら親父に、いろんな意味でやられるとこだったよ。

「それにしても、何年ぶりかな。こうして村の人以外とこんな気持ちで話をしたのは……」

顔を上に向けてミナは、一人、呟いていた。ああ、聞いちゃ悪かったかな

「ところでさ、ミナ。さつきからギャラリーが増えてきてるから凄く気になってしょうがなかったんだけど、こいつ等はなに?」

まあ、ミナがなにも言わなかったからたいした事じゃないんやろうとシカトしてただけど……。

まあ、これじゃあ、ギャラリー! っと言うよりも、“動物ふれあいランド” だな。だって、狼? 少し痩せてて、肋骨がうつすら見えかかってるけど。

「えっ!? ギャラリー? あつと、これはどうしよっかなあ」
言葉に詰まるミナ。だんだんと顔が青ざめていくのがひと目で分かった。

「もしかして、だけど。もしかしてこれが“幽魔” って奴なんじゃ

あ………」

何も言わずに、頭を縦に振るミナ。

「やばいわね。いつの間にか“ザーバ平原”入っちゃてたわ。話に夢中で気がつかなかった」

おいおい、そんなに大丈夫なのか？

まあ確かに、いつの間にか、昼間の太陽に反射して、周りを黄緑色に輝いた草、木が生い茂っている。ああ、この景色はさつきと違って結構きれいかも。

「ちょ、もうなに景色に今頃気づいて浮かれてるの。早く戦闘準備して！ 戦うわよ」

おお、ついに戦闘か。やっぱ戦闘が“異世界”の醍醐味だよなあ

「はいはい、患者さん。妄想はあとにして、今はやるわよ」

んー、患者はセーフなのかなあ……

姿勢を低く走り出し、ミナは一人で2匹の“F級幽魔”に突っ込んでいった

ケンカ

「なっ、おいおい。いきなり一人で突っ込むのかよ!？」

俺が声を発するのとはほぼ同時に、ミナは剣で敵に切りかかりに走った。おお、意外にもさまになってる。あれ？ でも剣なんてどこにあつたんだ？ それにあの剣……

「グギヤアア」

俺がいろいろと考えているうちに狼らしき敵が一匹、断末魔の声をあげ“ザーバ平原”の草むらに隠れるようにして横たわる

それを見届けるとミナは次のターゲットの狼らしき敵に向かって走り出した。

ミナは一番近くにいた奴を剣で切り払い、それと同時に……戻ってきた？

「あれ？ おかえり。早かったね」

狼らしき敵はよろよろと立ち上がってこっちを見ている。おいおい、本当にあれだけで大丈夫なのか？

「なにが“おかえり”よ！ 遊びじゃないんだからね。司も手伝いなさいよ。私はそんなに戦闘経験ないんだからね!」

そんなこと言われてもなあ。もはや八つ当たりじゃん

っと、言うおうとしたがもはやミナは俺の視界にはいなかった。よく周りを探してみると淡いピンクの髪が必死に戦っているのか激しく揺れている場所が視界に入った。かなり大勢いるのか苦戦しているらしい

「なにまったりと部外者気分で観察してんのよ。“ラナド”はまだおとなしい方だからいいけど、これ以上の階級だと確実にもうあなた死んでるわよ」

ミナの厳しい声を浴びせられる。あの狼らしき敵は“ラナド”って言っらしい。やっぱり俺らの世界では聞いたことも見たこともない生物だ……。

「ほら、私のあとに続いて。こいつらを一掃するわよ」

「……。さっきの会話。今の会話。人間戦場になると変わるんだなあ。ちよつと残念そうな顔をしながら俺もミナの後が続いて走り出した

「ところでさあ、ミナ」

俺はちよつと情けない声でミナに尋ねる

「なに？ 忙しいんだから手短に言つてよね」

かなり気が高ぶっているのか、声がビリビリと心に直接響いてきたそれを言い終わるか否や、またミナは2匹目に飛び掛つていた

「おう。じゃ、単刀直入に言うぞ。俺“武器持つてない”だから逃げていい？」

俺はキツパリと断言する。だつて仕方ないでしょ。今さつき着た俺に武器なんてあるわけもなく。そりゃあさ、俺だつて加勢出来るんならするさ。女の子が戦つてるのに男は見てるだけなんてのはさすがにな……。

「えっ！？ あっ！ きゃああっ……。」

「えっ、もしかして、予想だにしてなかったの？」

一瞬の隙を突いて、“ラナド”が1匹突っ込んできた

「しまっ……。」

「……！？ 何かが、破ける音。同時に後ずさるミナ

「なっ！ 大丈夫か、ミナ？ どうしたんだよ、いきなり剣を“ラナド”から外して、地面に向けるなんて」

「なに、バカ言つてんのよ！ 司がいきなり“武器ないから逃げてもいい？”なんて言うから、動揺して外しちゃったんじゃない。しかも、武器落としちゃったし……。」

ああ、そうか俺のせいだ。俺のせいだ。俺のせい……か？

「ああ、もう、服破れちゃったじゃない。せつかく“ドルフィン”行くからお気に入りの服着てきたのに……。」

いやいや、命あっただけマシだと思っただけど……。

「うう、俺に当たるなよ。悪いのは“ラナド”だろ？」

まったく、“ラナド”のせいではつちりもいいとこだ！

「ウルサイわね。今武器が無くて戦えないから司に当たってるんじゃない」

イライラと殺気を放つミナ……。くう、怖ええ。例えるならこの場にいる全てのものを飲み込むブラックホールがいきなり現れた感じた。

「って、おいおい！ メチャクチャじゃないか」

そりゃないよ。俺だって命は惜しいんだから

「もう、怒ったわ。司、あとで覚えときなさいよ」

ええ！！ 意味がわかんない。あなた、もしかして多重人格者！？

「そんなわけないでしょ。頭大丈夫？」

「……。で、どうするわけ？」

とりあえず、このままだと“ラナド”なんて、おかまいなしでミナが攻撃してきそうだったので話題を変えた

「ん？ そうね、“作戦B”で行くわよ」

「え？ あの、ちよつ……」

“作戦B”？ そんな、聞いた事もないっての。

「大丈夫。ちゃんとツリから貰って来てるわよ」

ウフフ、つと不気味な笑みを浮かべるミナ。一体これから何が起くるのだろう

「ねえ、いつそんな作戦作ったの！？ まだ内容聞いてないんだけど……」

「まかせて、あなたが作戦内容を知ってたら意味が無いの」

ええ？ なにそれ。共同戦線なのに、俺には内緒って。もうわけが分かりません。もしや、手榴弾で俺を囷にして“ラナド”を……。いや、はたまたマシンガンで……。いや、落とし穴……。ミミズ

の雨……。

「ああ、どれも考えただけで震えが止まらない……」

「なに1人で妄想してんのよ。じゃ、行くわよ。1・2の……。その時、ミナのカウントダウンと同時にここぞと待っていたのか“

「ラナド」が一斉に飛び掛ってきた

「そうだよなあ、かれこれ5分。ケンカを待ってたんだもんなあ。だけど、ついにシビレをついに切らしたか。」

「3」ミナの合図と共に、煙幕が辺りを包み込んだ

「うわあ！ これって煙幕！？ ミナ、一体なにやる気？」

「それに、俺はなにをすればいいんだ？」

「……………」

だが、ミナからの返事はなかった。

「はあ」こういう作戦か。まったく、俺もナメられたもんだな

「……………」

まったく、周りが見えずいたためちょっと危なっかしい足取りながらも俺は走った

「ふう、ここまで来れば大丈夫でしょ。いやあ、危なかったわ」

「ギャグギャー。つと混乱しているのかうるさく叫ぶ“ラナド”の聲がひどくうるさい騒音の中、ポツンと女の子の聲がこの空間に放たれた

「何が危なかっただよ。せつかく来てやったのにいきなり殺すきか！！」

軽く俺は、ミナを突き飛ばした

「ちよつ、良かった。生きてたのね。これで怒られなくてすむわ」

怒られなくてすむってお前……………」

「俺の命よりも自分の立場かよ！！」

本気で激怒する俺

「あら、冗談だよ。ごめんごめん。さ、気を取り直して、行こ行こ」
まったく……………」

「まあそれはいいけど、ところで俺には武器とかないの？ そりゃあ、使ったことはないけど無いってのは……………」

「異世界来た意味がないもんなあ。異世界の楽しみのほとんどは戦闘だもんなあ」

「まゝた、顔がニヤけてるし。これは、俊介に1票だね」

何か・・・呟いた？

「ん？　なんか言ったか？」

もう“ラナド”が追いかけてこないかちょっと心配だったので周りを見渡して見る

「うつうん、なんでもないよ。さ、そんなことよりとりあえず状況説明するから聞いて。1回しか言わないからね」

あからさまに動揺してるし・・・。それに俺は小学生じゃないっての「じゃ、まずは今からの動き方だけど」

今まで本当に考えて動いてたのか・・・？

「ま、私もそこまで頭のキレる方じゃないんだけどね」

なるほど。確かにミナはツリに何でも難しいことは聞いてたからな

「まあ、ツリの方が確かに利口そうだもんな」

「まあまあ、話を逸らさないでよ。時間が経つ一報じゃない」

んー、こういうのを嫁にすると、きっと旦那さんは一生苦労しそうだ。

「まだ文句ありそうな顔してるけど、今はいいわ。でさ、まずは地形のことなんだけど」

もう“ラナド”のことなんて忘れたように周りを気にせず地図を開いて俺に見せてくる

「地形？」

関係あるのか？

「そう、これから行く私達の村は周りが全部山に囲まれていて幽魔に見つかりにくくなってるの」

なるほど。頭の良い村人だな

「だから、ある程度まで離しておけば絶対に見つからないの。だから、今ここで私達が“ラナド”を連れて村に行くわけにはいかないのよ」

「なるほど。じゃあさ、どうやってあいつ等撒くの？」

「あわてないの。とりあえず、今は状況を把握しないと無理ね」

おお。なんか、映画みたいなシーンでカッコイイかも

「で、とりあえず後ろの様子見てくるからちょっと待ってって」
置いてけぼりか。まあ、武器ないし付いて行っても足手まといなだけか

「じゃ、行ってくるわね」

そう言うともミナはそそくさと草原の中に消えていった

それにしても・・・ここきてから何かとハプニングやミナに振りまわされて大事なことを忘れてたよ。さてと、ミナには悪いがちょっとこころへんどだけでも探検してみるかな。

「ヤッホー」

心を弾ませ、ススキプを刻みながら俺はミナとは反対側に位置する草むらへと入っていった

しばらく歩いていると岩が一つあるだけで、周りの草むらが短くなっているちよつとした休憩所みたいなのところにでた

「おっ！　なんだこれ？　おお。これつてもしかして玩具！？　でも、なんか変な形してるなあ。コマみたいなんだけど・・・軸みたいな棒がコマ全体に付いてる。なんか、意味あるのかな？」

その岩の上で不思議な物を発見！　早速いじくって見る。俺はとりあえず、コマと同じ動作を・・・紐を巻き、とりあえず回して見る事にした

・・・・・・。せっせっせと巻き方がわからないけど適当に長い紐を巻く。おそらく、こんなに集中したのは、第一回、俺VS俊介戦以来だろうなあ。いやあ、でもアレは楽しかったなあ。まあ、まさか5年も続くとは予想だにしてなかったけどな

「いたあゝゝ！　あんたなに勝手に移動してんのよ。心配したじゃない！」

「うわあ！　ミナ、いきなり目の前に顔出すなよ。驚くだろ！」

危ない危ない。心臓が飛び出る・・・いや破裂寸前だったよ。女の子がいきなり男の顔の前に顔出すなよ。あー、マジで焦った

「まったくもう食べられたんじゃないか心配し・・・あっ！　それジャーダマンじゃない。貸して」

そういうと無理矢理俺の手からジャーダマンとやらを奪いとる

「違う違う。そんな巻き方じゃ回らないよ。もっとこう、クルクルとね」

ええ！？ コマ全体に絡めるようにして巻くの？ つか、絶対に俺の心配してなかっただろ・・・こいつ

「……………」それで回るの？」

それでも、異界の玩具を前にしては怒りも消え、超真剣にコマを見つめた

「まあ、まかせなさい！」

……ところで、状況はどうだったんだろう？

「ところで、なんでここにいてわかったの？」

まだバクンバクンいう心臓を静めつつ冷静に言つ。そういうと、ミナは紐を巻く作業を止め、ただ一言……

「いいじゃない！ 無事だったんだしさ」

そういうとまたミナは作業を再開した

俺の立場って一体……。ちよつと虚しいなあ

「ほら。そんな顔しないでよ！　嘘に決まつてるでしょ。まったく、私がそんなに残酷非道で無責任な女に見える？」

「ごもつともで、的中ですな」

さらに俺は答えた

「ちよつと、それは失礼でしょ」

「じゃあ、なんで俺を煙幕の中置き去りにしたりさっきだって、心配したとか言いながら玩具に言葉取られてたのさ」

思わず怒鳴り散らす

「玩具のことは謝るわ。ごめんなさい。でも、煙幕の時や今この場所
所にいたときはちゃんと……」

その言葉を遮るようにして俺は言葉を入れる

「言い訳は・・・聞きたくない。もういいよ。別に俺なんて必要ないってことでしょ？ 分かったよ。どうせいても足手まといたもんな。俊介さえ入れば十分だもん」

少し、寂しそうにどんどん声を小さくしながら俺は続けた

「じゃあ俺、行くわ」

最後には聞こえるかどうかさえ分からない声で一言・・・

「ありがとな。でも後悔はしてないよ」

ポツン、と言い残した

「ちよ、司！」

そう言つとミナの声を無視して草むらに俺は身を隠すようにして必死に走った。

七色の空（前書き）

今回は文字数が少なくなっ
てしまいましたが、自分の一番好きな場
面を取り上げましたので、是非御賞味ください

七色の空

「はぁ、俺本当になにしてるんだろ」

未だ草むらが永遠と続いているおそろくまだ“ザーバ平原”は抜けていないみたいだ。だが、ひたすら走っていたらその先には断崖絶壁！ もう少し早く走っていたら落ちて死んでいたかもしれない。

それほど崖の下は暗く底なしの怖さを感じさせるものがあつた

「せっかくウキウキの冒険気分で“幽魔”との戦闘にまで立ち会つて最高の気分だったハズなのに・・・」

行く当てもなく、俺は一人寂しく崖の近くにあつた大人3人は寝そべることができそうな大きい切りかぶに腰掛けてぼやいていた

「はぁ、そくだよなあ。せっかく連れて来てもらったのに質問ばかりで村探しの邪魔して、戦闘になつても見るだけ。それでいて文句ばかり言つて」

視線を崖の下に向けた。その暗闇を見ているとまるで自分の心の中のようにさえ思えた。

それほど今の俺の心は暗く醜く感じた。こんな感じ初めてだよ。なんで・・・？

そうこう自己嫌悪しながら半時ほど経つただろうか。俺はその大きな切りかぶに仰向けに寝そべり、そして・・・空を見上げながら諦めたように暗く重たい声で呟いた・・・。

「はぁ、どう考えても悪いの俺じゃないか」

だけど、惑星がいくつかあるその空は明るく、七色の彩で美しく吸い込まれそうなほど綺麗な空を見ると、少し心が晴れた気がした
「あら。なかなか待つても帰つてこないからそうとう怒ってるかと思えば」

少し幸せを感じていた時、聴きなれた声がどこからか、いやまるでこの切りかぶが喋つたと思わせるほど近くで聞こえた

「だから、先に謝りに来たつて言うのに・・・。まさか先に謝られ

るとわね」

隣を見てみると背丈の似た女の子が俺と同じような体勢で寝そべりながら空を見つめていた

「意外に素直なんだね。司ってさ」

隣の女の子が今度は顔をこちらに向けてにつこりと笑う

「ミ、ミナ!? え、あ・・・ちょ・・・」

いきなりの出来事にうまく口がまわらない。ど、どうしよう・・・

「アハハ、慌てなくてもいいよ。別に怒ってないんだからね」

「あつ・・・」

俺は思わず言葉を喉まで運んでおきながら飲み込んだ。だって・・・これがミナ。自分の思ったことには素直でいてちよつと厳しい。でも、だけど・・・俺はそんなミナの笑った顔をみたとき、言葉にならないほどのミナのやさしさが心に染みてきた。

「ありがとう。俺少しやる気がでてきたよ。がんるよ! この先大変な目に会うかも知れない。死ぬほど怖い目に会うかも知れない。だけど、俺・・・信じるよ」

ミナに背中を向けるようにして横に寝そべりながら少し眼を閉じた。「うん。こちらこそありがとう。少し、楽になったよ。本当はね、あなた達を迎えに行ったときから心配で仕方がなかったの。村に置いて来たお父さんや村の人達。いまにも“幽魔”に襲われてるんじゃないか。ってね。でも、司と話をしたらなんか、不思議と心が晴れたんだ・・・。なんでかな」

少し震えた声で俺の背中の中を掴んで頭をくつつけて来た。まるで何かに怯えるまだ幼い猫のように・・・そして、安心したのかミナは空を見直したのを確認した俺はミナといっしょに空を見上げた。でも、今度は少し空がぼやけて見えた。なんでだろう・・・。なんだか、眼に水たまりが今にもこぼれそうなほど落ちそうなほど溜まってるや。

俺の眼に大きな・・・雨が一筋の線を描いて、降った。しばらく会話もせず、俺達はただ・・・空を見つめた。ただ・・・

ひと時でも長くいっしょに見ていたかったかもしれない。いっしょに・・・。

逃走作戦

「さてと、少し元気も出たことだし、早いとこ村に行きましょ」

「そうだな。どんなところか楽しみだなあ」

俺達はまた村に向かうコースに戻り、また見慣れた“ザーバ平原”をゆつくりと歩き出した

「あんまり期待しないでよ。今では村の規模なんだからね」

「今では？」

「そうよ。私はよく知らないけどお父さんが言うには昔は種族差別なんてなかったから共に共存しあい助け合う。大都市だったらいいわ」

大都市かあ。でも、昔ってことは・・・

「でも、滅びちゃったの。いえ、正確には住人が減りすぎて都市としては成り立たないほどの規模にまで人の数が減っちゃたのよ」

住人が減る？ 大都市なのにな？

「なんで？ なんで大都市なのに住人が減ったりしたの？」

少しの間、会話が途切れた。たぶん、あまり思い出さなくなかったのだろう

「争いが起こったのよ。都市の中でね」

なんでそんな・・・

「なんでそんなことに・・・」

「さっきも言ったようにその大都市は共存しあったからこそ、みんなで力を合わせて苦難を逃れてきたからこそできた大都市だったの。でも、種族差別で・・・」

そこまで言うと、またミナは口を閉じた。

そうだよな。言いたくないよな。なにが原因でそんな種族差別なんか起こったかは知らないけど。友達同士で、知り合い同士で、家族内でそんな争いが、殺し合いが・・・。そんな光景をミナは見てきたのかな？ だから、空を見ているときもあんな心配そうに村のこ

と言ったのかな

「と、ところでさ、村まであとどれくらいかかるの？ まだこの“ザーバ平原”も抜けてないみたいだけど・・・」

俺は思い切って話題を変えた

「えっとね、この“ザーバ平原”を抜ければあとちよつとのはずよ。だから、そうね。あと1時間くらいで着かないかしら」

そう、俺達がこの“ドルフィン”に来てからもうすでに3時間は経っている。さすがにそろそろ疲れてきたな

「あー、早く着かないかなあ。“フレツティ”にさ」

暇だなー。と見飽きた草を掻き分けながら愚痴をこぼしていると・

「しっ。静かに・・・。ゆっくりと伏せるわよ」

「・・・！ どうしたの？」

「静かに。いい、今“ラナド”が私達を囲むようにして大群でこちらを見てるわ。襲うチャンスを待ってるのね。それにしても、いつの間にか追いついてきてたみたいね。さすがに油断したわ・・・」

なっ！？ 周りに“ラナド”がいるって！？

チラッ。つとおそろおそろ後ろを振り返ってみる

「グルルルルッ」

「うわぁ！？」

怖えエー。草木が高々と生えているにもかかわらずその草木の隙間から鋭い眼光が・・・しかも、めちゃくちゃ威嚇してるー。

「うるさいの！ 襲ってくるでしょー！！」

イツテエ。ミナもすぐに叩くんだから。つつか、ミナの方が声大きいから・・・。

それにしても、やっぱり怖えエー。野性の本能むき出しだな

「なあ、俺達はどの方向に向かつてるんだ？」

そこが分からないと逃げようもないしな

「そうね、大体このまままっすぐ行けばそろそろ村に着くと思うわ」

「でも、それなら逃げ切れるかも。一気に走れば“ラナドの群れ”

も俺たちを見失っておつて来れないだろ」

「甘いわよ。どうしてこれだけの私達の身長よりも高い草木が立ち並んでいて“ラナドの群れ”が追いつけたと思ってるの」

「どういうことだ？　じゃあ、“ラナドの群れ”が俺達のことを追つてこれたのは偶然じゃないってことか・・・？」

「匂いよ。“ラナド”がF級とまで恐れられて理由は、瞬間的に相手の匂いを覚える能力“セント”。その能力があるからこそ、“ラナドの群れ”は常に、どんな状況でも、群れで行動することが出来るの・・・。それが、“ラナド”の怖いところよ」

“セント”。俺達の世界“ウェーリー”ではありえない能力だな。でも、こんないろんな能力を見つけたり、もしかしたら別の形として使えたりもする。それがやっぱり異世界の、冒険の醍醐味でしょ！！

よし、そうと決まればこんなところでは死ねないな。もつともつとこの世界“ドルフィン”を見てまわりたい。不思議で楽しいものをもつて見たい

「わかったならすぐにも行くわよ。このまま待っていても危ないだけだわ」

「もちろん！　早いとこ村行こう！　いっぱいミナやツリにこの世界“ドルフィン”のこと聞きたいしな」

「アハハ、司は冒険とかになると雰囲気かわるわね。こんな状況なのにな」

ミナは苦笑しつつも俺の考えをわかってくれたのかな。なんか、初めて会ったときよりも、まだ4時間も経ってないけど笑ってくれた時の顔がやさしくなった気がする。

「さーで、そんなに聞きたいならいっぱい聞かせてあげるわよ！　そのためにはまずここを生きて潜り抜けないとね！」

「おう！　さつそく突っ込むか！！」

体力も回復したし、気も充実してる。今なら死ぬ気はしない！！　「待つて。まあ、知らなくても無理は無いわね。覚えておいて。」

「ラナド」は群れる数は軽く50〜100にもなる。しかも、「こざーバ平原」では特に「ラナド」は多いの。すぐにでも群がるわ。それと、これは今じゃ村人の常識。村人では一番遭遇しやすく、命の危険性もある。だから、私達村人はこの事態に対してそれなりの能力を身につけてあるの」

村人の常識か……。みんな頑張ってるんだ。生きるために！

「じゃあ、今の状況も簡単に脱出できるってこと？」

ちよつと、期待。

「そんなわけないでしょ。そんなんだったら苦労はしないわよ。でも、ツリさえいれば、なんとかなるかもしれないのに……。」「ツリ？ なにか逃げ出すのとの関係があるのかな？」

「まあ、今はとにかく逃げましょ。これが最後の煙幕よ。これを私が投げたら全速力で突っ走るわよ。おそらく追いつかれるだろうけど、その時はまかせて。今度はあんなミスしないから。頑張ってるわ」

「何言ってるんだよ。そんなことさせるわけないだろ。それと、いい作戦も考えたんだ！ ちよつとその煙幕貸して」

俺は自信気にミナの手から煙幕を取った

「うん。やつぱりな。この煙幕は俺達の世界“ウェーバー”とあんまり変わらないな。これなら使える」

そういいながら俺はポケットからアレを探した

「どういうこと？ なにかそんなに凄い秘策でもあるの？」

おっ！ あったあつた

「まあ、見てなつて」

俺はそう言つと着々と準備をし始めた

「そうそう、それと刺激臭のある燃えやすい物つてここら辺にない？」

ソレが今回の作戦の鍵になるからな。

「んー、あつ！ あるわよ」

そう言つとミナは地面を這いずり回るように見渡した

「あつた、あつたわよ。はいコレ」

そう言われてミナが俺の手に握らせたもの。それは・・・

「石？　ちよつと紫色をした毒々しい感じだけど・・・」

そんなに大きくはないけど毒入り砲弾にさえ見える

「そうよ。この石の名前は確か“痺香石”だったかな。詳しいことはわからないけど、この前ツリの研究材料を採取してた時にコレも集めてたからたぶんあつてゐるわ」

“痺香石”。こんな毒々しい石を一体ツリは何に使うんだろう。ああ、どことなく危ない実験しか浮かばない・・・。

「一応確認だけど燃えるよね？　石って言つてたけど」

「もちろんよ。石が燃えるなんて子供でも知つてゐるわよ。常識じゃない」

ちよつと待て！！

「聞き捨てならないんだけど・・・。こつちの世界“ドルフィン”だと石は燃えるの？　どんな石も？　紙とかみたいに？」

「当たり前よ。そつか、そつちの世界“ウェーバー”では石として形は同じだけど燃えないの？」

やつぱり桁外れに常識外だよなあ。“幽魔”の存在だけでなく一見同じようにしか見えない石まで性質が違ふなんて・・・。楽しみだけど、ちよつと心配かも

「うん。まあ、燃えるんならいいや」

コレをここに置いて。つと・・・

「よし！　でーきた！　これで脱出の準備は万端だな」

なにがしたいの？　と言う感じの目でミナが見ているのでとりあえず説明

「なるほどね。意外と頭良いじゃない。さすがは私達を騙しただけはあるわね」

苦笑しながらミナも準備を整える

「おいおい。そこまで言うか・・・。まあ、悪知恵なら俺と俊介の十八番さ」

これなら誰にも負けない自信がある。……。まあ、滅多に役には立たないけど

「ほらほら。ちょっと自信があつたことが普段役に立たないからつて感じて落ちこまないの」

見事に読まれてか……。

「せっかく今この瞬間役に立つ時が着たんだからやるわよ」

そうだ！ この命がけの場面での脱出方法は俺が考えたんだ

「よし。行くぞ！ 今役に立たなくて俺はいつ役に立つんだ！」

「いやー、まあそれはそれで困るけどね」

「……そこでツツコまないでよ」

ちよつと悲しくなるじゃないか。

「ほーら、またテンション下げないの。せっかくノツてき……」

「」

「ギャオウオオオオ」

……。！？ 相当な数の“ラナド”の咆哮。これはいよいよ襲ってくる気満々だな

「あら。あちらさんもかなりテンション高いわね。でも、負けられないのよ司。もつとこの世界“ドルフィン”を知りたかったら死ぬ気で生きなさい！」

そうだよな。負けるってことは死ぬことだもんな。こんな感じ……。生まれて初めてだよ。さらにこの肌に感じる嫌な感じ。おそらく、これが殺気。

「いい？ やるわよ？」

3

「OK。いつでもいいよ」

つて俺が考えた作戦な気がするんだけど……

2

「離れるんじゃないわよ」

1

「大丈夫だって。俺はこれでも16才なんだから」

0

「ちっちゃいのね」

「うるさい。気にするな」

謎の幽魔

同時に走り出す、俺とミナ。幾度と無く響き渡る足音。俺とミナは、殆ど同じ速度で走る。

「な、なあ。ここ抜けたらもう村まで近いんだよ、な？」

未だ視界の晴れない煙幕の中と痺香石の匂いを必死に我慢しながら走った

「そう、ね。そろそろ着くと、思うわ」

息を切らしながらも必死に俺達は会話を続けた……。もしかして、辛さ倍増？

足場は雑草が生えているもののほとんど平面なので転ぶことはないけど、やっぱり怖くて思うようにスピードはでないな……。

もはや、冒険なんて楽しむ余裕もなく、とにかく必死に村に向かって俺達は走った

「人間、小癪なマネを……。ダがあまい。俺様をこの程度で撒けると思ふな」

え……。人の、声！？ なんなんだ一体！？ 他の人間がいたのか！？

パニクるあまり足がうまく動かない……。

「ウラアアアア」

力のこもった罵声のような低い声。それと同時に……

「なあっ！？」

俺の体に電撃のようにして走る、今まで味わったことのないような痛み

「うあああああああ」

“ラナド”の牙が右肩の服、右肩に深く食い込んでいる

「ちよ、大丈夫！？ 司！」

慌てて逆そうし始めるミナ。

「クソ、イツテエ。なんなんだよ……」

右肩に今も喰らい付いたまま離れようとしないう“ラナド”。こいつ・
・俺の肩を食いちぎろうとしてるな・・

「だからあまいと言っただ。その程度の実力で俺様達のテリトリー
に入ろうとは・・。やはり、人間はおるかだ。そんなにいい物持
つていても宝の持ち腐れだ」

「いい物！？ 持ち腐れ！？ こいつ・・さつきからなにを言っ
てるんだ？」

それに、この食っている奴。他の奴とは明らかに違う。言葉が通じ
ることもすうだけど、見た目が・・なんと言うか怖い！ 右目は
何かに切られた様に傷のあとが深く残っていて、体もすっかり他の
奴とは違って肉が付いている。その体にも傷が全体にある。

こいつ、間違いなくこの“ラナド”の群れのリーダーだな。こいつ
さえ何とかすれば・・

「ぐう、おら。落ちろ。この・・やろ」

必死に痛みを耐えながら揺さぶるが、こいつ・・なかなか離そう
としない

「ふん。止めておけ。無駄な足掻きだ！ そんなことしたらお前の
腕が早くなるだけだ」

くそ、どうすれば・・。

痛みを耐えられず、俺は思わず片足を地面に下ろした

「もう・・限界だ・・」

今まで味わったこともない急激な痛みで目の前がだんだん暗
く、意識が薄れていくのを感じた

「なに諦めてるのよ。男でしょ」

・・・・・ミナ？

「ぐうあああああ」

ミナの声と同時に、俺の肩の辺りの痛みが少し和らいだ
おそらく、ミナがこいつを蹴り飛ばしてくれたんだ。

「くっ、助かつ・・た。あり・・が・とう・な」

もう、意識を保てない・・

「ちょっと、司。なにそんな死ぬような言い方してるのよ！」

「……………」

「その声は、ミナか？ ミナなのかヨ？」

「……………。おそらく倒されていたであろう“リーダー的ラナド”は驚いたように少し裏返った声でミナに話しかけていた

「その声は、まさか“フィード”なの！？」

「そうだ。まさか俺様たちが襲っていたのはミナだったなんて……………」

「

「それにしても、フィード。あなた…………ら…………み…………に？」

「そ…………知らなかった…………。…………れるんだ」

くそ、こいつ一体何者なんだ。ミナの知り合いなの…………か？

「ち…………と、司！……………！！！」

も…………限界…………だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2831b/>

Town Revival

2010年10月11日02時06分発行